

潮出版社

2

平林たい子全集

平林たい子全集 2

昭和51年 9 月15日 印 刷

昭和51年 9 月25日 発 行

著 者・平 林 た い 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・島 津 矩 久

発行所・株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋 3 - 1 - 3

電話 東京 (03) 230 - 0741 (販売部)

230 - 0781 (編集部)

振替 東京 5 - 61090

郵便番号 102

印刷 第一印刷株式会社 製本 株式会社 鈴木製本所

© 1976 Shinko Teshirogi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担で“お取り替えいたします”

目次

妻君展覧会	9
植林主義	19
ある日の丸の内	30
彼女たち	37
監督の好意	43
未だ生きていた男	46
装身具の番人	48
股眼鏡	52
露店記	54
転落	57

不幸と幸福 72

賢夫人 106

含監 110

救農工事 117

没落の系図 136

煉瓦の破片 148

二階の姉妹 167

春 178

繭 189

貧乏嚟 195

桜 203

知識階級論の一素材 211

愚な人 224

章魚 226

『レヴィンソン』 238

土曜日の夜 242

ある朝鮮人 252

女の問題 254

アンテナの下 266

女の街道 268

その人と妻	275
青い暈	290
フリジヤの花	300
羽織	304
エルドラド明るし	309
人の棲家	348
自動車と貞操	356
燕の都	364
三人	374
解説・和田芳恵	387

平林たい子全集

2

妻君展覧会

——或は亭主展覧会——

一

亭主の声。

「花ちゃあん。花ちゃあん。いいお湯だから早くおいでよウ」

「はい。何を大きな声出してるのさ、今行くわよ」

女房は下腹部の表面に笑靨のように凹んでいる臍を出して、赤い都腰巻から二本の足を抜きとった。

「お松」

彼女は女中を呼んだ。そして白い腕を二重に折って乳房の両わきに寒そうに押しつけて縮んだ。

「お腰と下褌新しいの出しといてね。おお寒っ、寒っ」

やがて、腰のまわりに幾本かの黒い紐の跡のついた裸体が風呂場の硝子戸をあけた。

湯の流れる音と、亭主の胴川氏の喋る声とがきこえてしばらくたった。

白い磨硝子の窓にピシャッと湯がかかる音がした。つづいて、ピシャッピシャッと湯がかかった。

「口惜しいッ。ようし、こうしてあげるわ」

「なに、そんなことで驚くもんか。それじゃこうだ」

二人は浴槽の中で湯をかけ合っている様子である。

乳色の磨硝子が黒く濡れた。そこへ二人の肉体の輪廓が桜色にぼんやりとうつつた。さあ……さあさあ……

「さあ、お花さん、そろそろ上るとしようじゃないか」

「知らないッ」

「おや、怒ったの。どれ、こっち向いてごらん」

男は、その時、濡れた毛深い手を女のだぶだぶした柔かい顎にかけたに違いない。

「憎らしい人っ！」

声と一緒に起ったバチャンという濡れた音は、女の小さい厚ぼったい手が男のきめの粗い肌を打ったのであろう。

「打ったな、ようし」

「ばちゃん。ばちゃん。」

こんどは、男が女の肌を打った。

骨は細いけれど、幾重もの脂の多い肉がとりまいて太い彼女の股の肉はたたかれる毎にぶるぶる……とこまかく揺れたろう。

「ねえ、白粉をおつけよ。上るんだから」

「一寸まってよ……」

白い蒸気を放っている血の循環のよい二個の裸体が廊下に現れた。

二人の会話だけを外できいていた者はこの男を、少くとも三十歳以上の男とは想像しなかっただろう。女との年の

釣り合いからいっても。

だが、意外にも廊下に現れた胴川なる人物は、どんなに少く見つもつても、五十歳を下りようはない血肥りの頭の禿げた背の矮い親爺だった。

二

「また二人で一緒の風呂？　和気なものですわ。和氣っていうよりも、むしろ頹廢的ですよ」

隣に住む腹太氏の夫人静子が、井戸水を濾過するタンクの下に立って蔑むように笑った。

話しかけられた相手の女は、生垣のこちら、今の風呂場の外の井戸端で、亭主の穴のあいた靴下をしきりにこすっている。この近所では、もっとも生活程度が低いと目されている足助の細君で、君江という。足助夫婦は胴川の宅地の隅にある物置のような離室を間借している。

「でも、私、あの方々の生活を想像すると、何だか胸が悪くなります。無智で本能的で、いつも享楽を求めているような……」

君江は漢語だらけの言葉を笑ってあしらっていたが、

「ほんとですわ」

と軽く同感した。

「男性の玩具ってのは、あんな女のことをいうのでしょうかね」

静子夫人は、さらに、君江の同感を強要するように、ね

ばりづよくいった。君江は、靴下が片附くと、台所から大きい鍋蓋と庖丁を持って来て、人蔘と馬鈴薯を傾斜したその蓋の裏で切りはじめた。

「文化生活でしょう。これが簡便組板っていうんです。ほっほっほ」

君江は、静子夫人がきつと何かいうだろうと思って、先を越していった。

「あら、こんなの、一寸も文化生活じゃないわ。文化生活ってのはあなた、道具が揃って、手数の省ける生活のことですよ」

教える様にいつてから静子夫人は急に思い出したように、「それはそうと、貴女は、台所の電化っていうことについて御研究になったことありません？」

「え？」

とお君は思わず問いかえしたが、多少皮肉に、

「いいえ、一寸も」

「まあ、あなたみたいに新しい方が、それをお考えにならないのは不思議ですよ」

君江は借間の便所のつづきにある汚い台所をちらと見て皮肉に微笑した。

静子夫人にはいうまでもなく、その微笑の意味はわからなかった。その時、女中が台所口の扉をあけて、

「旦那様がおかえりになりました」といって来た。

「あ、そう」

といった静子夫人は、急に鬢かつらの様な庇髪ひがみに手をあげて形を直したり、襟を合せたりしながら言った。

静子夫人は、夫君腹太氏よりも五つ上の四十歳である。

夫よりも年長であるということが彼女にとって何よりの煩悶であるらしい。それは、彼女の服装がよく説明している。彼女の着物には、いつも、劇薬を撒りかけたような毒々しい大きな絆がついている。または、刺青いれずみを刺し込んだように鮮やかな花の模様がついている。

年とった女の、年齢に不似合な派手なつくりは、ますます彼女の濁落を誇張してみせるものだ。だが、我が賢明なる静子夫人にして惜しいかな、このことには気付かぬらしい。三人の子供の母である彼女が、どうして、こんな服装をするようになったか、その動機はいたって簡単である。数年前のこと、腹太家とっている新聞の夕刊に次のような口癖が出ていた。

年上の妻を殴っているのを見た警官。おいおいお母さんを殴っちゃいけないじゃないか。

殴った男。いいえ、これは母じゃありません。

警官。たとえ姉にもせよ。

この心なき一口噺がいかに、彼女の弱点を強く抉ったことであつたらう。彼女が、こんな着物を好んで着るようになったのは、それ以来だつた。母でもない。姉でもない。自分は実に腹太の妻であることを着物に語ってもら

うために。

静子夫人の夫腹太氏は洋服を脱ぐとすぐ風呂場へ行った。「やあ、きょうはちょうどいい加減にわいていますね。有難う」

腹太氏は、その平生の如く、紳士的な言葉で妻に感謝した。が、なぜか、静子夫人は、戸を細めにあけて、風呂場へさし出した首を引っこめなかった。

「加減はちょうどいいですよ」

腹太氏は、寒いのでそこをしめて貰いたさに今一度いった。

「お背中流しましょうか」

「いいです。流して貰うのはくすぐたくて嫌いですよ」
腹太氏の言葉は紳士的ながら、だんだん痞高ひだかくなった。

「ねえ、そこを締めといて下さい」
遂に彼はいった。

静子夫人はしおしおとそこを締めて去った。

晩酌の卓に向つた時、妻君は亭主にいった。

「あなたつてかたは、ほんとに妻を喜ばすことを知らない方ね。お隣の胴川さんの御夫婦なんぞ見てごらんないましょ。きょうだって、お二人で仲よく一緒にお風呂に入っでいらつしたわ。私だって、姑があるわけじゃなし、お風呂に位一緒に入りたいと思いますわ」

彼女は、先刻井戸タンクの下で、賢さかし気に君江に、胴川夫婦を批評してみせた言葉などすっかり忘れていた。

それから、彼女は、隣の夫婦がいかにむつまじいかを長々と羨し気に話した。

しかし、話しているうちに、だんだんに、それは、お花夫人が、いかに無智で、無教養で、男に愛玩されることしか知らない女であるかということの説明になって行つた。

「こないだもね、公民権がいよいよとおりでそうですねっていつてやつたら、コウミンケン？ わたし、何のことだったか一寸度忘れしてしまつて、思い出せません、ですつて。はっはっはっは。やつぱり、私、婦選は、教養の高い婦人にだけ、先ず与えるべきだと思いますね。そうでなくっちゃ、お花さんなんぞに与えた日には、どんなとんでもないことに使うかわかつたもんじゃありませんわ」

「そりゃたしかに一理ありますね」

腹太氏は、目を細くして上機嫌に、この「教養の高い」妻を眺めた。

静子夫人は、公民権のことから、ひよつと思ひ出した。

「ねえ、私、こんど、細男（長男）の学校で保護者の婦人を代表して挨拶しなくっちゃならないんですの。どんなことをいえばいいでしょうか。お暇の時に草稿つくつて下さいましよ。口でいうとおりにかいてね」

三

「花ちゃん。ラジオはじまつたよ」

桐川氏が、茶の間で女中と喋っているお花に声をかけた。

「何なの？」

「朝顔日記だ」

「大してききたくもないんだけどネー」

お花は、食卓の上にあつた朝日の箱を持って立上つた。

「ガスストーブもつけなさいよ。この室さむくつていやんなつちやう。お松、炭とり持つて来て——」

暗い喇叭の奥から、途切れ途切れに三味線の音と、「はっ、はっ」という呼吸のつまるような掛声がきこえた。

「×太夫はやつぱりいいねえ」

桐川氏はしばらくは感嘆してきいていたが、やがて、例のように、お花の頬つたをついたり、膝をくすぐったりしはじめた。

「ねえ、お前のもみ上げは長い方じゃないんだから、髪はもう少し下へとかした方がいいよ」

桐川氏は手を伸ばしてお花の前髪の櫛をとり、鬢の毛を梳ろうとした。

「煩いッ。よして頂戴そんなこと」

「おやおや」

「ねえ」

とお花は声を改めて彼をよんだ。そして、話の邪魔になるラジオのスイッチを切つた。

「ねえ、あのこと、お願いだからきいて下さいよ」

「あのこつて何だい」

「またとぼけるのね。あなたは。小春さんと手を切つて下

さいって、いうことよっ」

「小春さんどうしたって」

「何とほけてるのよ。この親爺っ」

とお花は早口にいったかと思うと、疣うぶのような涙を錦紗の前掛の上にぼろぼろ落した。

「俺は聞かん。そんなことお前の関係したことじゃないんだ！」

胴川氏は生章魚たこをうでたように、俄にし、やんとして、お花の前に端坐した。

「外で女と遊ぶのは、男の働きだ。お前には小春を世話したからって何の不自由もさせたことはない。そんなことまで口出したらきかんぞ」

「だってエ——」

お花は胴川氏の態度にのまれて、ちぢみ上った。

小春というのは、お花が半玉だったころの姉芸者である。

胴川氏には、外にまだ、前に使っていた女中だとか、料理屋の仲居だとかで月々いくらかずつ生活の補助をしてやるような関係の女が三人ほどある。某一流新聞の経済記者だった彼が、四五年前に首になったのには、某紡績資本家とからんだ経緯があるといわれているが、退社後、彼はその噂を裏書きする如く、時々、その資本家と同車で工業クラブへ現れたり、赤坂へ、現れたりして、曖昧な、しかし、多額の金を持って戻って来た。この家を建て幾人かの女を世話するようになったのも、この四五年来のことである。

俺程女を対等に扱っている男はないだろう——女と一緒に湯に入ったり、時には女と自動車で高尾山や箱根へ出かけたりして、自分の女に対する「寛大」さを享樂している。この「寛大」さは美人でさえあれば、いかなる女性の前にも發揮される、だが女が自分にじゃれつくための奔放さならどんなことでも眼を細くして許すが、自分の意志に反して行われることならば、たとえたった半日の暇にお花が母の所へ行つて来ることをでも許さない。

茶の間の隣の火の氣のない女中部屋で、ひび薬をつけた手をふところ手して、二人の会話をぼんやりきいていたお松は居眠りをはじめた。すると、ラジオがまた始まった。「今夕六時の天気概況——那覇では三メートルの風晴……」

「お松、布団敷いてよ」

「喧嘩はもう終ったのかしら」

お松は欠伸をして立上った。二人の室からキャッキャッとお花の笑う声がした。

四

「俺胴川の風呂をかりに行つて来ようかな」

「よしした方がいいわ。あの親爺私たちをしきりに警戒しているらしいわ」

「何でだろう」

「あの細君に何か理窟でも吹き込むと思つてゐるんでしょ

う」

煙草工場の事務員である足助は、女房の君江と、夕食後
謄写版を千枚ほど刷った。

「きょうも電話をかりに行ったらね、まあお茶でもお呑みなさいって坐らしといて、僕達は、こう見えても、二人で一緒に風呂へ入るし、二人で一緒に活動見に行くし、二人で一緒にラジオをきくし、男女平等で、あなたの方の主張と変りませんよ、むしろこの点ではあなた方よりもすすんでいるつもりですって」

「はっはは、よかったね」

「つまり、私たちが一緒にラジオをきいたり、活動に行ったり、お風呂へ入ったりしないのが、あの人達よりもおくられているという理窟なんです、あはは」

二人には、一緒に入るべき内風呂もなく、二人できくべきラジオもなく、活動を見るべき金も暇もなかったのである。胴川氏が君江に突然そんな厭味をいい出したには理由がある。

きのうのことであった。君江が井戸端にいと、お花が珍しく台所口から出て来ていろいろな世間話の末にあなたにぜひ話したいことがあるといい出したのだ。実は夫が外であまり遊ぶので、自分はこのごろ煩悶している。いっそ年も若いんだし、どうにかなるうちに別れてしまおうかと思うがどうだろうというのだ。

君江は勿論そんなことに軽々と返事をすまいと思ったが、

お花がいかに熱心に目に涙を浮べていうので、つい、男にたよっている生活には、かならず男の支配と専制がある。だから、あなたがその気なら、先ず何か一つ仕事を持つことを考えて男から独立することを企てたらどうだろう。あなたは未だ若いんだし、煙草工場へでも入る気になるなら、何とかお世話しようといった。と、お花が呆れたように、大きな声で、

「え？ 煙草工場へ？ 女工に？ 私が？ まさか。おお寒くなって来たわ」

とぼたばた家の中へ駆け込んでしまった。それだけならまだよい。晩酌か何かの時に、お花は胴川氏に足助の細君があたしにあなたと別れて、煙草工場になれっていったわ、という風にいつつけたのである。

「え、あの醜女しうにょがそんなことをいったの。生意気な。間借人のくせして。いいよ。お前そんなこと気にするこたないよ。……冗談いっちゃこまる。足助のような意気地なしじやあるまいし。ヘン、俺の目の黒い間は、お前に女工どころか木綿の着物を着せるようなことはしやしないよ」

そこで、胴川氏がお花をそんな風に慰めたのである。――

足助は君江の話をきいていたが、終に、

「あなたは、あの可愛らしい半玉さんを同志にするつもりだったのかね」

と皮肉にいった。

「まさか。だけど、あんまり可哀そうだったからつい吊り